
覚悟しいよ(^_^)/

国後旺

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

覚悟しいよ（＾―＾）ノ

【Nコード】

N0497E

【作者名】

国後旺

【あらすじ】

十日前に東京に引っ越したショウタと、福岡に残されたショウタの彼女…ユリは、メールによる対話を始めた「ハズ」だ。（全四話）横書きでご覧下さい。十分程度で読破できる長さです。（ジャンル：ケータイホラー）

Re:その後

- - Eメール 1件 - -

●ケータイ画面に表示されたその知らせを見て、シヨウタは受信メールを開いた。

送信者：ユリ

件名：Re:

本文：お！ ケータイ買ったんや

(*^|^*)

良かったわー(〒|〒)

やっと連絡とれるようになったね

これからは

毎日メールするけん！

覚悟しいよー(^|^)/

シヨウタはそのメールを読んで、安堵の溜め息をついた。そして、返信メールを打つ。

件名：Re2:

本文：お前こそ覚悟しろ(^|^)v

送信。

興奮を抑えるために、シヨウタは自分の部屋のベッドにあお向けに倒れた。心臓の音が聞こえてくる。

●シヨウタは小学六年生であり、思春期にあたる時期だ。そして、彼女も居る。それがユリ。

しかし、今よりも二ヶ月も前に、家の事情で引っ越し、ユリとも離ればなれになっていた。

ユリは福岡。シヨウタは東京。軽々と遊びに行ける距離ではない。

電話という手段はあったのだが、時間がかかる上に、切りたくないという思いから、ついつい長電話になってしまい、引っ越しから一週間で親から禁止令を出されていた。

しかし今日、シヨウタは必死の説得に結果、やっと親の了承を得て、ケータイを買って貰い、はれて連絡が取れるようになったのだ。

シヨウタはユリに逢えないことに歯がゆさを感じていたが、それも、これで少しは和らぐだろう。

シヨウタは、次のメールを待った…。

やり取り

● ショウタが東京に引越して一週間後のこと。

「ゴメンね、ユリ。お父さんがお金がかかるからダメって言うんだ」
そう言われたユリは、あまりのショックに、その後の話に耳を傾けることはできなかった。

ユリはショウタとの連絡手段を無くした。

否、本当に無くしている訳ではない。なぜなら、ユリから電話を掛ければ向こうは料金を払わずに済むからだ。

しかし、幼さ故^{ゆえ}が、その事実を二人は知らない。

ユリの家族はその事実を教えなかった。なぜなら、家族はユリがショウタと連絡を取れなくなった理由を知らず、「取れなくなった」ではなく、「取らなくなった」と勘違いをしていたからだ。

一方、ショウタの父親もその事実を教えなかった。なぜなら、電話の向こうの相手…つまりユリに、ショウタを奪われる気がしてならなかったからだ。

しかしユリは、新たな連絡手段の扉を、最後の電話を終える直前に作った。

ショウタが別れを告げる直前、ユリは我にかえり、あることを言った。それは、ユリのケータイのメールアドレス。声を震わせながら、ユリは丁寧にその暗号を何度も繰り返し伝えた。

ショウタはそれを電話越しに聞きながら、紙に書き記した。途中、鉛筆が何度も折れた。

そして、全てを書き記し、二人は別れを、

「ケータイを買ったら、メールをしてね」

「一番最初に送る。絶対」

「絶対だよっ！」

「うん」

告げた。

●それから三日後の夕方。ユリのもとに一通のメールがきた。それは、知らないアドレスからだった。

ユリは少し不審に思いつつも、メールを開いた。

送信者：oooooooo@ezweb.ne.jp

件名：(non title)

本文：ショウタだよ！（^^）！

ケータイ買ったの（^^）の

父上様を説得するの
大変やったわ（-|-;-）

ユリはベッドの上で飛び跳ねた。驚きと喜びを隠せていなかった。
まさかこんなにも早く再会するとは、夢にも思っていなかったか
らだろう。

ユリは自らの高鳴る鼓動を感じながら、返信メールを打った。
頬が若干赤い。

件名：Re：

本文：お！ ケータイ買ったんや

（*^|^*）

良かったわー（〒ー〒）

やっと連絡とれるように
なったね

これからは

毎日メールするけん！

覚悟しいよー（^|^）／／

ユリは焦りながらも、なんとか打ち終えた。 そのときの焦りが
若干メールに現れていることに気付かず、そのまま送信した。

ショウタのアドレスを記録して、次のメールを待った。

●数分後。 ユリのもとに、返信のメールが届いた。

送信者：シヨウちゃん

件名：Re2:

本文：お前こそ覚悟しろ（^| ^）v

ユリは「覚悟しよう」と思った。

●翌日の昼。 ユリは学校に居た。そして今は昼休み。

ユリは、もしメールが届いていたら、他の子に見られたくないという思いから、女子トイレに入った。

そして、サイレントマナーモードにしておいたケータイのチエツクをした。

案の定、メールが届いている。シヨウタからだ。

それも、届いた時間は十二時半。今より一時間もまえだ。少し申し訳ない気がしてか、ユリは恐る恐るメールを開いた。

送信者：シヨウちゃん

件名：（non title）

本文：よ！ 元気？

俺は超元気だよ（。。。）

勉強はドコモ難しい

しゅん（――）

ユリは相変わらず

エリートかな？

なんてねー（――）

メールの内容を見て、ユリは笑う。そこにさっきまで居た不安は、どこかへ逃げていった。

件名：Re：

本文：おかげ様で（*^ー^*）

エリートだよー。

きらーん ふふふー。

勉強ね。だいじょーぶ！

シヨウちゃんは

やればできる子よ（^ー^）／

送信。

「シヨウちゃん……」

ユリは、ケータイを「ギュッ」と、強く握りしめた。

●ユリは教室に戻り、席にっていた。

不意に、授業中じゃないため、通常マナーモードにしておいたケータイが震える。 ショウタからのメールが届いたのだ。

さつきまでは、他の子に内容を知られることを恐れていたが、その注意はショウタのメールの内容が知りたい思いでかき消されていた。

その姿が気になってか、ユリの周りに数人の子供が集まる。

その中、一人の女の子がユリに、「誰からー？」と訊いた。

話し掛けられたユリは少し驚いていた。どうやら、子供達が近づいていたことに気付いていなかったらしい。

「ショウタ君から、だよ」

質問されて答えないのは流石に失礼だと思っただけ、ユリは答えた。

「ショウタから!？」

数人の中の、一人の男の子が声を張り上げる。

「なんやアイツ！ 俺にはなんも連絡ナシなのにー」

その男の子はショウタと仲が良い子で、ショウタとよく遊んでいた。

ユリもそれを知っていたから、一つの連絡も無いことに少々不自

然さを覚えていた。

しかし、その疑念はすぐ消えた。

「お前、ケータイ持ってないやん」

「あ、そうやったな。はー、ウツカリしとったわ」
「アンタぐらいだよ、持ってないのは」

というやり取りを聞いたからだ。

「で、なんち（なんて）書いとる？」

「え？ えっとね……」

他の男の子が、メールの内容を知りたいと、目を輝かせる。ユリがそれに応じる。

この日からしばらく、こんなやり取りが続くことになる。

このやり取りこそが、ヒントであることに、ユリは最後まで気付かなかった。

(n o n t i t l e)

●ユリとシヨウタのメールのやり取りが始まって、早一ヶ月。それは、もはや日課となっている。

そして、その内容は本当に他愛のないモノだ。

メールの内容

宛先：シヨウちゃん

件名：R e 2 : R e 2 : R e 2 : R e 2 : R e 2 : R e 2 :

R e 2 : R e 2 : R e

本文：友達できた（^| ^） / ？

そっち楽しい？

送信者：シヨウちゃん

件名：R e 2 : R e 2 : R e 2 : R e 2 : R e 2 : R e 2 :

R e 2 : R e 2 : R e

本文：結構できたなー（^| ^） /

方言通じんけん

ちよつと疲れるけど（- - ；）

まあまあやねー（- - ）

空気はそっちのが美味いよ

（* ^ ^ ）ノ

でもさ、

やっぱ、そっちがいーよ。
ユリが おるけんね（^ - ^）

宛先：シヨウちゃん

件名：Re2：Re2：Re2：Re2：Re2：Re2：

Re2：Re2：Re

本文：もー（^ー^*）

そげん言ってから

浮気しとつたら

承知せんけんね（。 - 。）フフ

送信者：シヨウちゃん

件名：Re2：Re2：Re2：Re2：Re2：Re2：

Re2：Re2：Re

本文：こわッ（。□。；）！！

気をつけます（^ー^；）

宛先：シヨウちゃん

件名：Re2：Re2：Re2：Re2：Re2：Re2：

Re2：Re2：Re

本文：よし（*^ー^*）

という感じだ。それは毎日、ユリの中でエネルギーに変わっていった。

もう、依存症と言っても過言ではないだろう。今のユリにとってケータイは、まさに命の次に大切なモノになっていた。

●話は変わるが、ユリはこの一年で大きく変化した。

正確に言えば、シヨウタがユリを変えたのだ。

●それは半年前。ユリが六年生になったばかりの頃。

これから一年間を共に過ごす班を決める、クラス会議中のこと。

ユリの隣の席になったシヨウタが、ユリに話しかけた。

学年は上がったが、クラス替えはしていないため、ユリはシヨウタがどんな人物かはだいたい知っていた。

ユリは当時、今よりずっと内気でおとなしい子だった。そのため五年生のとき、ほとんどクラスに打ち解けることができていなかった。

一方、シヨウタは真逆の存在。彼を嫌う者はこの学校にはいないだろう…。それほどまでに、彼は人に好かれていた。非常に明るく、クラスに笑いを産むのが得意だった。

ユリとはあまりに釣り合わない相手。

ユリもそう思っていたからだろう。本当に驚いていた。

そして、シヨウタは言った。

「エトウさん、だよな？ 隣り同士、仲良くしよっ！」

その微笑みに、その差し出された手のひらに、エトウ ユリは吸い込まれていった。

しかし、それはあくまでユリにとって信じられないことだっただけで、シヨウタはだいたい前からユリのことを気にしていた。ただ、そのことにユリが気付いていなかった…それだけのことだった。

それからというもの、シヨウタはユリに付きつきりだった。そして、ユリもシヨウタの影響を受けて変わりつつあった。

「伝えたいことは自分で伝えなよ」

「もうちょっと前に出ないと。それじゃダメだよ」

「笑った方がいいって。絶対そっちの方が可愛いよ」

「ユリと一緒にだと、俺、すっごく嬉しくなるんだ」

たくさんの言葉を貰って、ユリは内気な性格が、少しはマシになった。笑顔を浮かべることができるようになった。友達ができた。シヨウタのことを、好きになった。

そして、言葉では貰えないモノも貰った。

ユリの頭の中には、もう、シヨウタしかいなかった。

それでも気付けなかったのか。それとも、だからこそ気付けなかったのか…。

●シヨウタが引越して、二ヶ月後の夕方。ユリは宿題を終わらせて、疲れたのか、眠っていた。

その時からだ。

このケータイに、彼のメールがくるようになったのは。

ユリは、着メロの音に気付いて目を覚まし、誰かからのメールが届いたことを知った。

それは、知らないアドレスからのメールだった。ユリは、その重い^{まぶた}瞼を開いて、「迷惑メールかな…？」と言った。この二ヶ月でユリは、多少の知識をつけていた。

そして、そのメールを開いた。

ユリは、ユリにとって不思議なモノを見た。そのメールの内容は、

送信者： @ezweb.ne.jp

件名：(non title)

本文：ゴメンね！

遅くなっちゃった（＜―＞）

ケータイ買ったぜ！

以上。

シヨウタからでした！

（^^）／またな！。

「どういうこと……？」

ユリは、そのメールの内容を、信じることはできなかった。

それでも、何かが引つかかったのか、ユリは「シヨウちゃん」からのメールを読み返し始めた。そんなことをしても、意味はないのに。

その馬鹿な行為は見るに耐えなかった。

だから私は、最後にもう一度だけ、メールを送ってやった。

ケータイから着メロが鳴る。

それはユリが今まで、ずっと大好きだった、音。

そしてユリは、たった今送られてきたメールを見て、困惑の表情を浮かべた。

送信者：シヨウちゃん

件名：Re2：Re2：Re2：Re2：Re2：Re2：

Re2：Re2：Re

本文：やっと気付いたんだね。

残念！ 遅すぎたネ

タイムオーバー（@|@）

ユリがケータイをベッドに放り投げた。私はケータイ画面から、華奢で青白く、腕力のある腕を出して、ユリの顔面をカーペットに叩きつけた。

そして 私は ユリを

●ユリの泣き顔は、今まで私に見せてくれた…どの笑顔にも負けな
いぐらい、最高に面白かった。

その後

●その部屋には、数時間前まで人が居た為か、生活感が部屋全体に漂っていた。

しかし、その部屋には、誰も居ない。

●暗闇の中で、着メロが鳴る。

その部屋のカーペットに、ポツンと一つだけケータイがある。恐らく、そこからの音だろう。

不意に、ケータイが開いた。開くはずがないのに。

- - Eメール 一件 - -

ケータイの画面が、新着メールを表した。

送信者： @e z w e b . n e . j p

件名： (n o n t i t l e)

本文： ユリ？ もしかして、

届いてないかな？

ユリ。

俺、ケータイ買ったから。

もし、ユリじゃない…

違う誰かに送っていたと

したら…

間違えました。

ごめんなさいm(┐┌)m

ケータイ画面が、返信メールを表した。

宛先：

@ezweb.ne.jp

件名：Re：

本文：お！ケータイ買ったんや

(*^|^*)

良かったわー(〒|〒)

やっと連絡とれるようになったね

これからは

毎日メールするけん！

覚悟しいよー(^|^)ノ

画面上に表されたそれは、その宛先へと送られた。

その後、ケータイ画面はメモ帳に切り替わり、こう記された。

送信者：

@ezweb.ne.jp

件名：Re2：

本文：お前こそ覚悟しろ(^|^)v

今度はキミの番だね、シヨウちゃん。

その後（後書き）

e
n
d

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0497e/>

覚悟しいよ(^_^)/

2010年10月15日20時55分発行